

他方、娼妓のいた遊廓は、北の廓とも呼ばれた十四番町遊廓。十四番町は昭和5年当時、本町通14番町を中心に東堀通13番町、四ツ屋町、寄附町、翁町、西受地町、横七番町通2丁目にまたがり、貸座敷は94軒、娼妓は約500人いました(「全国遊廓案内」)。

そんな十四番町も戦後は赤線に。新潟市観光協会が発行した昭和31年の「新潟観光案内」によれば、十四番町には当時25軒の「新興飲食店」があったようです。「観光案内」はQ&A形式で綴られているのが特徴で、遊廓はあるのかという問いに対しこのように答えます。「今は遊廓というものはない。ただし新興飲食店として市内各所にある。十四番町のほか本間町に17軒、月町・雪町16軒、金比羅町10軒、山ノ下に17軒ある」と。遊廓はあるのか?という問いは、女遊びできるredlight districtはないの?の言い換えと見るのが妥当です。答えは新興飲食店。それがあった地域が、市内の赤線地帯だったと僕は睨んでいます。各所を散策したところ、一目でそれと分かる建物にはなかなか出会えず、残念でしたが、寄附町で十四番町遊廓の遺構だと思われる妓楼らしき建物を発見できました。

今回は6カ所の色街跡をご紹介しますが、いかがでしたでしょうか。この手の街歩き面白さは、全国の地方都市のそこいら中にネタが落ちていることに尽きます。皆さんがお住まいの近くにも何か埋まっているかもしれません。街を探ることで意外な発見があれば幸いです。最後に、採り上げた街の散策にお付き合いいただいたthe ishikuraと先輩記者の西川喜代次さんに御礼申し上げて、大引けとさせていただきます。誠

#### 主な参考資料・文献

- 「赤線跡を歩く2」木村聡／自由国民社
- 「赤線跡を歩く完結編」木村聡／自由国民社
- 「大阪府警察年鑑1957」大阪府警察本部
- 「貝塚市商工名鑑昭和28年版」貝塚市役所
- 「貝塚市史」貝塚市役所
- 「消えた赤線放浪記」木村聡／ミリオン出版
- 「岸和田市商工名鑑昭和24年」岸和田市役所
- 「岸和田市史」岸和田市
- 「岸和田・貝塚今昔写真帖」郷土出版社
- 「京都新聞」京都新聞社
- 「京都府警察史」京都府警察本部
- 「軍隊を誘致せよ」松下孝昭／吉川弘文館
- 「篠山町七十五年史」篠山町役場
- 「三文役者のニッポンひとり旅」殿山泰司／白川書院
- 「全国花街めぐり」松川二郎／誠文堂
- 「全国女性街ガイド」渡辺寛／季節風書店
- 「全国遊廓案内」日本遊覧社
- 「新潟観光案内」新潟市観光協会
- 「新潟市史」新潟市
- 「新潟市商工案内」新潟商工会議所
- 「新潟の花街古町芸妓物語」藤村誠／新潟日報事業社
- 「兵庫県警察史」兵庫県警察本部

## 官能的映画論 “YOUNG ANIMAL”

皆さん、こんにちは。今回ゲストにお招きいただき、press collectiveに寄稿させていただくことになったYOUNG ANIMALです。

滋賀県彦根市在住の私にとって平日のアフターファイブはもっぱら家で過ごすことが多いのですが、いつからか映画を沢山観るようになりまして、ある程度好きな監督の作品や良いと聞いたものなんかを観てきて気付いたことがあります。それはSEXシーンの印象的な映画が自分の心に強く残っているということです。もちろんSEXシーン見たさに映画を観ているわけではないのですが、赤裸々な濡れ場がその映画の世界観へと引き込むスイッチの作用をしている気がしてならないのです。

例えば中国のロウ・イエ監督の『パリ、ただよう花』(2011)という作品で女優のコーヌ・ヤンは相手役の若いフランス人と出会い、一緒に夕飯を食べ、帰り道の工事現場でSEXをします。コーヌ・ヤンはどちらかというと美人な方の女優では無いと思うのですが、非常に華奢な体の彼女が強引に誘われてすぐ体を許してしまい気付けば激しく求めている姿に引き込まれてしまいます。置かれた環境のまったく違う二人に未来が無いことは明らかなのに、惹かれ求めあって何度も体を重ねるシーンには色気と共にすぐに壊れてしまいそうな危うさと倦怠感が付きまとい画面から眼を離せなくなりました。

デヴィッド・クロウネンバーグ監督『危険なメソッド』(2012)はユングとフロイトの確執をテーマにした作品ですが、ヒステリー患者として登場する女優、キーラ・ナイトレイの治療が進むにつれて、彼女は医師であるユングに思いを寄せ、彼もそれを受け入れてしまいます。過去の性的トラウマから罰を受けると興奮してしまう彼女との性的交渉のシーンは不倫関係であることとナイトレイの美貌とが相まってすごくスリリングでした。ユングがフロイトと決別するきっかけともなる彼女の純真なユングへの叶わぬ愛情がいつつSEXから伝わってきました。

ここに紹介したもの以外にもクロード・シャブロールの『石の微笑』や『引き裂かれた女』等も強く印象に残っています。挙げればキリが無いのでこの辺にしときますが、映画の持つ非日常性への誘導をSEXが担っている映画があることは明白で、私はそういう映画が好きという話でした。暗くて緊張感があり、どこか冷めているのにSEXによって情念が溢れ出し心が動かされる。そんな刺激的な映画に今後も出会えることを願っています。もし皆さんがこんな話に興味を持ってくれたら幸いです。ご拝読ありがとうございました。

### information

今回のcollectiveはYOUNG ANIMALをスペシャルフィーチャー。19:30からはじまる妖気なプレイを楽しんでいただければ幸いです。楠田行展の長編記事にもご注目を。

次回のcollectiveは晩夏を予定しています。詳細はブログでご確認下さい。http://blog-collective.blogspot.jp/

press collective

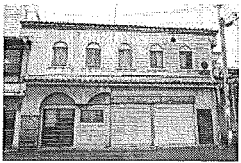
## 備忘録 夢の街跡 第6回色街特集 貝塚、岸和田、篠山、福知山、新潟を歩く “楠田行展”

皆様こんにちは。collectiveにご来場、誠にありがとうございます。6回目を数える本稿は今回、6に因み6カ所の色街跡をご紹介します特集でお送りします。大阪府貝塚市近木(こぎ)の貝塚新地、岸和田市の花街、兵庫県篠山市の京口新地、京都府福知山市の猪崎(いざき)新地、新潟市の花街古町(ふるまち)、そして同市十四番町遊廓を探り上げます。

### [貝塚]

まず貝塚新地から。貝塚は、大阪と和歌山を結ぶ紀州街道が通る泉南地域の都市で、明治以降、紡績業が発展しました。昭和33年に市が発行した「貝塚市史」には、「近木町新地遊廓は明治時代の成立に属する」とあり、遊廓成立以前貝塚藩が、紀州街道沿いの北之町と南之町の旅籠で営業を認めていました。昭和5年の「全国遊廓案内」によれば、当時の貸座敷数は43軒で娼妓は270人。赤線の時代である昭和28年にまとめられた「貝塚市商工名鑑」には、39軒の業者とその屋号が載っていました。所在はすべて近木。近木地区は、南海貝塚駅から西へ徒歩1分の立地で、まさに駅前遊廓の様相を呈していたようです。

売春防止法施行後に消滅した貝塚新地跡は現在、高級料亭として営業中の「深川」を中心に、純な飲食店街として稼働しています。妓楼やモダンなカフェの遺構も残っていました。訪問時は缶ビールを片手に散策し、桃色や青の豆タイルが美しいビルや、アールの付いた門や窓がある建物を拝見しました。壊れかけの宝石のような建物が放つ独特の空気を堪能した後は、市街地から南東約8km山手の相谷(きびたに)地区に。ここには遊女之墓があり、江戸後期の貝塚の娼妓お千代が郷里に帰る道中、川に映る自分のやつれた姿に嘆き、断食の末にこの地で果てたという哀しい伝説が残っていました。



### [岸和田]

貝塚から紀州街道を北上すると、岸和田市に入ります。岸和田は徳川幕府が開かれた後、岸和田藩の城下町として栄えました。毎年敬老の日直前の土日に行われるだんじり祭りが有名で、市内には、町会単位で所有する山車を収める小屋があちこちに見られます。

さて、岸和田に赤線があったのか。結論から申し上げますと、(オマリーよろしく)「キシワダニ、アカセンハ、アリマヘン」。大阪府警が昭和32年に発行した「大阪府警察年鑑1957」には、府内12カ所の赤線のデータが残されていますが、岸和田は含まれていません。岸和田歩きのきっかけは、仕事で取材先に向かう途中、街道付近に妓楼のような建物を偶然発見したことから。史料を繰ったところ昭和4年発行の「全国花街めぐり」には岸和田に花街があると記述がありました。花街とは、芸妓がいる街区。娼妓がいる遊廓とは違い、一般的には料理屋、芸妓置屋、待合(貸席、お茶屋とも)の3つの業種からなる地帯を指します。プレイスタイルは至って簡単。待合はブレイルームで、そこに客が入ります。料理屋から料理を取り、置屋から芸妓を呼んで、待合で料理と芸を楽しむというものです。

「岸和田市史」では明治45年の資料を元に職業統計を出していますが、それによると岸和田町(当時)には93人の芸妓がいたとのこと。昭和24年の「岸和田市商工名鑑」によれば、市内に14軒待合があり、堺町、魚屋町、大北町、大手町に点在していました。データを元に南海岸和田駅を起点にして、ねちっこく歩くこと2時間半。堺町と大手町で待合の遺構を発見しました。以前から気になっていた建物は、堺町にある若水という待合跡だったと判明。長屋スタイルが特徴で、豪華さは全くなく庶民的という言葉が似合います。奈良県の花街のように戦後、青線化したのかも妄想を膨らませながら、土着の居酒屋で一杯いただき、帰路につきました。



### [篠山]

「デカンショ。デカンショで半年暮らす。あとの半年寝て暮らす」の民謡デカンショ節の発祥地で知られる兵庫県中東部の町、篠山市。篠山は篠山城を中心に城下町を形成し、町には芸妓のいる花街もありました。明治後期には、市街地の外れに京口新地と呼ばれた遊廓が成立し、京口新地は戦後、赤線地帯として機能しました。

京口新地については、昭和30年に発行された「篠山町七十五年史」に詳しく、同著によると、明治40年に同町付近に設置された兵営の存在が遊廓の契機になったとありました。設置されたのは陸軍歩兵第170連隊の兵営ですが、連隊って何人いたかご存じでしょうか？正解は1000~2000人。当時は町の発展のために遊廓を作ることもしばしばで、需要を見込み遊廓の誘致運動が起きたそうです。同町から3カ所候補地がありましたが、コソリ動いた隣の八上村に遊廓設置が内定。京口新地は明治41年7月、同村糯ヶ坪(もちがつぼ)に誕生しました。糯ヶ坪への決定は「(遊廓は)兵営より一里(約4km)を隔離する事」という要項に合致したからだそうです。松下孝昭著の「軍隊を誘致せよ」に面白い話があるのでご紹介すると、兵営誘致の中心になった篠山町の森本庄三郎氏は、糯ヶ坪の土地所有者でもあったとのこと(笑)。なかなかの人物ですね。京口新地は創業当時、妓楼が1軒、娼妓は7人でしたが、同年12月には12軒、79人に増大。「兵庫県警察史」によると昭和21年には8軒、37人。「七十五年史」の昭和30年には10軒、30人と推移しました。

篠山には昨年12月21日に訪ねました。発見したのは1軒のカフェ跡と1軒の妓楼跡。カフェは造りが堅牢で存在感を放っていました。他方妓楼は、阿部定事件の阿部定が娼妓として最後に勤めた旧大正楼と推測されている建物でした。大島渚を思い出して「愛のコリーダ ♪ふん、ふふふ〜ん♪」。でたらめな鼻歌を歌いながら、写真を撮りました。



### [福知山]

福知山市は京都府の北部、丹波地方の都市です。明智光秀が築いた福知山城は、町のシンボルの一つ。プロレスラー小橋建太の出身地であることも一部では常識となっています。僕は散策前にご当地の図書館で資料を探すことをルーチンワークとしていますが、探訪した1月12日はあいにく市立図書館の休館日でした。後日、府立図書館で資料を拾おうとしましたが、必要な資料がないという体たらく。ダブルで墓穴を掘るダブボケでした。

手元にある「全国遊廓案内」に、「福知山駅を下車すれば北東へ約十二丁の處に在る。乗合自動車の便があるから猪崎で下車すれば宜しい」とアクセス方法をご指南いただきました。1丁は109mと少し、12丁なので1.3km強。乗合自動車は路線バスみたいなもの。駅前の食事処で「光秀御前」をランチした後、観光案内所で地図を入手。案内所では一応「いざき」というところに、花街めいた場所(赤線という直接的な表現は使わず)があったと伺ったのですがと問い合わせました。すると、おじさん「いざきです」と訂正を加えた後、位置と方角を教示。バスはアテにせずJR福知山駅から歩くことにしました。

訪問時は雪交じりの雨に見舞われましたが、収穫は多かったです。現在の歓楽街浮世小路にも寄り道しながら、1時間以上歩き、猪崎新地跡に到着しました。多くは住宅に変貌していますが、大店の妓楼を住居にしている地元の方も結構おられました。また猪崎には正面のみカフェ調で中身は小さな妓楼という看板建築の典型例があり、赤線跡りの妙味を感じました。「遊廓案内」によれば昭和5年当時、妓楼が78軒で娼妓は160人。「京都府警察史」にある昭和7年のデータによれば業者69軒で娼妓163人。同8年、業者65軒、娼妓146人。同9年、業者65軒、娼妓146人と推移しました。また売防法施行直前の「京都新聞」昭和33年3月15日の記事には業者47軒、従業員が50人いたとありました。



### [新潟]

新潟は、市内を流れる信濃川と阿賀野川、そして日本海に囲まれた水の都。古くから美人の都と呼ばれた町でもあります。6年前に初めて新潟を訪れた時、色白の僕が、淡雪のように色の白い女性の多さに思わず口元が緩んだことを覚えています。

新潟市内の芸妓のいる花街の代表は、古町と沼垂(ぬつたり)の2カ所。沼垂は消滅しましたが、古町は現在も芸妓がいる花街として稼働中です。古町花街は、東堀通8番町と同9番町、古町通8番町と同9番町、西堀前通8番町と同9番町の全体を指し、市の歓楽街の中心地。飲食店、スナック、性風俗となんでもござれ。今も続く古式ゆかしい料亭、鍋茶屋の創業は、江戸末期の弘化3(1846)年で、169年の歴史があるそうです。「全国花街めぐり」の昭和4年当時の古町は、置屋103軒、芸妓総数約403人、待合29軒、料理屋約30軒。また昭和30年発行の「全国女性街ガイド」には置屋58軒、芸妓総数212とあり、半減しました。直近の数字については藤村誠著「古町芸妓物語新潟の花街」に詳しく、平成23年時点で24人だとのこと。今回の訪問では予算の都合もあり、遊ばせませんでした。いずれは挑戦し、その成果をご報告したいと思っています。